

平成29年度 第1回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会 議 名	平成29年度 第1回宇治市小中一貫教育推進協議会
日 時	平成29年 8 月 2 日（水） 18時00分～20時00分
場 所	宇治市役所 6 階 6 0 2 会議室
出 席 者	（委 員） 榊原会長 薮副会長 松元委員 村田委員 井戸本委員 内田委員 石田委員 川嶋委員 葛山委員 （事務局） 石田教育長 岸本教育部長 伊賀教育部副部長 藤原参事 瀬野教育支援センター長 福山教育支援課長 金久一貫教育課長 富治林学校教育課長 縄手教育総務課長 辻一貫教育課副課長 渡邊一貫教育課総括指導主事 大越一貫教育課学校教育指導主事 山花一貫教育課学校教育指導主事
配付資料	平成29年度第1回宇治市小中一貫教育推進協議会資料 平成29年度中学校ブロックジョイントプランー小中一貫教育推進計画ー

1 開会

- ・石田教育長 開会挨拶
- ・各委員自己紹介
- ・事務局自己紹介
- ・設置要項に基づき会長に榊原委員、副会長に薮委員を選出
- ・榊原会長挨拶
- ・薮副会長挨拶

2 報告及び協議事項

- （1）報告1 平成28年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動概要
資料 6 頁に沿って事務局より説明

（会長）

昨年度の推進協議会の活動概要について報告を受けたが、新しい委員から「どういうことか」という質問や、昨年度の取組の視察について、「こんな感じだった」という追加説明はないか。

（委員）

これまで複数校視察してきたが、去年は中でも特色がある南宇治中学校ブロックを視察させていただいた。中国からの帰国子女をスムーズに受け入れるための取組や中国武術の指導など、先生方の「ここが大事にすべきところ」という懸命な取組姿勢と、時代の変化にも対応していく大変なご苦労が印象に残っている。

（委員）

去年は会長だけが複数校視察しているようだが、複数校行かれて各中学校ブロックごとの「違い」というのは、その取組状況の中で見られたり感じられたりすることはないか。

（会長）

視察の際のプログラム内容がそれぞれのブロックで違うので、純粋に比較するのは難しい。

南宇治中学校ブロックは、先程発言があったように、中国からお帰りになった方とか、その背景を持つ子どもさんや、それに関わる授業やその準備が印象的だった。

宇治中学校ブロックでは、学級ではなく学年レベルで教育目標を立てていることを新鮮に感じた。小学校の校長先生から聞いた話だが、学年でまとまりを持って中学校へ進んでもらうという意図があったのかもしれない。

西小倉中学校ブロックでは、施設・設備の老朽化に学校としても苦勞しながらも、子どもたちを温かく迎えながら、一貫教育に対する意欲を感じた。

(委員)

平成20年から関わってきた立場から話をするが、当初は単なる一保護者に過ぎず、小中一貫教育に対するイメージも全くなかった。平成20・21年頃から宇治小学校を小中一貫教育のパイロット校にするという意味合いで、「施設一体型」の学校建設の話が持ち上がった時には、宇治市全体がそういう形に変わっていくのではないかとというイメージを持った。だが、実際10年目の今日に立つと、そうではなかったという現実がある。

本格導入されて6年目を迎えるが、私も何校か視察させていただく中で、やはり各ブロックそれぞれに置かれている状況が違うということを受け入れていかななくてはならないのでは、という思いになってきている。平成24年度の本格実施の時には、各ブロックの条件は違っても公教育なのだから画一的な内容が実施されていくことが「良し」というイメージであったが、そうではないのかなという感じに今は至っている。

置かれている環境の違いを認めた上で、「総合的な一貫教育」という捉え方をした時、お互いに良い所を引き出し合っていくという方向性が今の段階ではないかと、一保護者・地域の者として宇治市の教育を見せていただいている。

(委員)

学校現場としては、小中一貫教育の成果は確実にあると言える。

一昔前だと、私はずっと中学校の教師だったので、小学校の先生と話す機会はほとんど無かった。小学校の職員室がどんな雰囲気で、子どもの活動がどんな内容なのか、すぐ近くの小学校であってもわからなかった。だから、中学校の中にある「文化」と小学校の中にある「文化」が全く違うということを、全然予想していなかった。

私が若い頃、入学した1年生の旧6年生時の担任の先生方が授業参観に来られて「小中連絡会」をすると、ひどい時には「大ゲンカ」だった。「小学校では何でこんなことをきっちり指導せんのや！」と私達が言うと、小学校の先生は、「そんな管理的な締め付けみたいなことをしたら、子どもたちがかわいそうや！」みたいなことを言い合って、最後には、当日司会の教頭先生が、「いろいろ意見はあろうが、ネコは大きくなっても畳の上で飼えるけど、トラの子は大きくなったら畳の上では飼えん！」と、また最後にケンカを売って終わっていた。

そういう時代と比べると、施設一体型ではなくても、小中学校の教師同士が年間に顔を合わせる機会がかなり多くなった。それは、目に見える形での絶大な成果につながっている。各教科指導での連携や小学校と小学校の連携をベースにした中学校との連携を進めている。学校現場サイドからすると、小中一貫教育は準備段階からすると絶大な成果が出ていると思う。

(委員)

私は、分散進学の新島中学校ブロックで3年、同じく東宇治中学校ブロックで1年、そして、宇治黄檗学園で3年を送らせていただいている。

小中一貫教育はあくまで「手法」であり、一貫教育の全面実施が始まって6年の間に、それぞれのブロックでそれぞれの良さを出しながら「プラス1」の仕事をして、それなりの成果をずっと挙げてきていることは間違いないと思っている。

ちょうど「施設一体型の一貫校」が立ち上がる時に、周りの方は、宇治市には順々にこういう一貫校が建っていくんだというバラ色の夢を描いていた。いつかはうちの学校もあんな校舎が建ってあんな風になるんだと思われた方がたくさんいた。だから、同じ宇治に通う児童・生徒の施設面での不公平感がすごく言われた時もあったのではないかなと思う。

それにしても、やはり「施設一体型」の効果は大きい。小中学校の教員がいつも顔が見え、一緒にいる「施設一体型」の効果は計り知れない。これは、分離型の先生方がいくら努力されていたとしても、条件が違い過ぎるなとすごく感じる。教員も転退職や新規採用等で大きく替わる時期だが、「施設一体型」にいと毎年大きく入れ替わってもすぐに慣れる。「分離型」では、合同研修会等で全職員が顔を合わせるのは年に1・2回程度。やっと顔と名前が覚えられたら、また体制が替わっていくというところにも困難さがあると感じる。

一貫校を預かる校長としては、早くもう一つ一貫校を造ってもらって、互いに切磋琢磨したいなという気持ちが正直なところだ。

(会長)

本協議会が一貫教育の進捗管理を預かっているのだが、10年という時間を振り返った時どの組織にも修正や変更が起こり得るが、教育委員会としては見通しをどう考えているのか。

(事務局)

宇治市全体の今後を大きく見通した時、人口が減少傾向にあり、おのずと少子化が更に進んで、児童生徒数も減少していくだろうと予測している。

今、総務省の指導の下、「公共施設の総合管理計画」を作成しているが、その中では当然学校教育施設も全て対象になっている。そこで今後、長寿命化とか維持管理も含めたトータルコストでどう市の財政を維持運営していくかという課題も突きつけられている。そういう中で、施設の老朽化に対応できていない学校が数多くあることも私たちは認識している。また一方、ソフト面の「分散進学の是正」とか、効果的な一貫教育を推進するための「施設一体型の一貫校の整備」、それから一貫教育校の「老朽化に課題を持つ施設の再整備」という形で、ネクサスプランと兼ね合わせながら施設整備をどうしていくのかが私たちに突きつけられている課題である。

学校施設に全く手を着けないということはあるまいので、ネクサスプランの中身と公共施設をどうしていくのかということとを兼ね合わせながら今後検討していきたいと考えている。

(会長)

教育長のご挨拶の中で「教職員の人口動態の変動」という話もあったが、実際現場の教師の受け止め方や感覚はどうか。「中だるみ」という厳しい言葉もあったが。

(委員)

私は27年度まで宇治黄檗学園で教務主任をし、昨年度の長期研修を経て、今年度ひろの学園に転任した。「中だるみ」については、実際にあると感じている。5月の総会で、ひろの学園の今年度一番の研究ポイントとして、「当初に取り組み始めた時の思いとか、どういうことをねらっていたのかということをもう一度見つめ直し、必要なものであるならばしっかりと取り組み、もしそれが実態に合わないものになっているのであれば思い切ってスクラップして何か別のものを」と方針を立てた。夏の合同研修会が8月にあるが、例年の全体会では講師を招いて講演を聴いていたが、今年はそれを止めて、学力と児童生徒交流を2本柱に、現場の教師が実際何を考えているのか、これまでの思いがちゃんと伝わってきているのかを本音で語り合う予定にしている。何らかのアクションを起こさないと「中だるみ」は解消しないと実感している。

(会長)

若い教員が増える中で、最近来られた方を見てどう感じているか。

(委員)

そこも課題だと感じている。教務主任やコーディネーター・各分掌の主任レベルは、施設分離型であっても密に連絡を取り合い日々一緒に仕事をしているという感覚もあり、学園全体のことをわかっている。しかし各担任レベルになると、自分が担当している分掌のことはよくわかっているが、違う分掌が進めている内容についてはあまりわかっていないのではないかと思う。若い先生に聞いても、自分が担当している特別活動部のことはわかるが、学力充実部が今何をしているのかは見え

ていない。そこをどうしたらいいのかということも次の研修会の課題と考えている。

(2) 報告2 平成28年度小中一貫教育の取組到達状況報告
資料7頁に沿って事務局より説明

(委員)

私は、笠取小学校という一番小さな山の学校と木幡中学校というマンモス校に関わっているが、木幡中学校の先生が笠取小学校で授業をしたり、笠取小学校の子どもが中学校の行事等に参加したりと機会ある毎に交流をしている。また、小学校同士でも小小連携を活発に進めており、子どもたちがいざ中学校へ行った時に、「あっ、御蔵山小の〇〇さん。」というつながりが生まれ、不安を取り除く一因ともなっている。入学当初は緊張もし、山の子はあまり表に出たりもしないが、徐々に仲間の中に入り、リーダー的な存在になる子もいる。親からよく心配の声を聞くが、中学校に入ると実際には心配事は少ないと思う。

(委員)

今年度、宇治黄檗学園の育友会長をしているが、小中一貫校になると行事数も倍になるので、事業の整理と保護者の理解を得ていかなければならないと思っている。

連合育友会の立場からすると、「いじめ・非行防止キャンペーン」があり、「あいさつ運動」を小中合同で行うことから取り組んでいるが、今年度は小中の取組を一層強化していこうと話している。小中各ブロックの会長さんが話し合って、「あいさつ運動」の計画を立てている場面をよく目にしている。

(委員)

小学校の保護者にとっては、中学校の定期テストというのは高校入試の内申点につながるというイメージしかない。だから、あのテストをきっちりやっておかないと高校に行く時内申点が悪くなるという声をよく聞く。保護者同士でそんな話があると、家でどうしても子どもに言ってしまう。中学校に行くと、テストがあるとか部活があるというイメージが大きく親の頭の中にあるので、ついつい子どもにもそんな先入観を植え付けてしまっているのではないかと。定期テストが高校入試のイメージとリンクしてしまうというのは、小中一貫教育とは違うかもしれないが、親からすればそういう所に目が行ってしまう実態もある。

また、私は現在数人の予備校生を預かっているが、その子たちがギャップを感じた第一段階目が中学に上がる時だったらしい。その点からすると、小中一貫教育で小中の間にクッションを設けているのはありがたいことだと思う。

(会長)

私は個人的には、一貫とは「ギャップも併せて一貫」でいいと思うが、よくスムーズな接続とか連絡とかいう。それも大事だが、成長の機会だとすればギャップもあっていいのではないかなと思う。小学校から送る側からすれば、定期テストに限らず、保護者や子ども自身も、「小学校とは違うんだろうな」と思っていると感じることはあるか。

(委員)

「ギャップを完全に無くす」というのは違う捉え方だと思うが、定期テストに対して不安があって、その不安の中の一番の問題点を取り除く取組を進めることは、ギャップを無くすことにつながるからダメだということではないと考える。例えば定期テストのことでいうと、今ひろの学園で進めようとしているのは、中学の定期テストの方式を全て前倒しでやろうとするのではなくて、計画的に勉強するという中学校の良さを学ばせようとしている。小学校では、勉強した翌日にテストがあるので対応できる。中学校はそうではなくて、自分で計画的に課題を決めてコツコツ学習していかないと対応できない。そこが急に変わるので、中学校の計画的に見通しを持って学習していくやり方を中学校の先生に教えていただいて、取り組もうとしている。それは、ギャップを全て無くす

のではなく、どこの部分の不安を無くすのかが大事だと考える。

(3) 報告3 平成29年度小中一貫教育推進協議会の活動について(案)

資料8頁に沿って事務局より説明

(委員)

昨年私が、「(委員による中学校ブロック視察について)一人で行っても辛いところがありますね。」と言ったら、会長から「みなさん、とりあえず2回は行きましょう。」と提案された。結局私も都合がつかず1校のみの視察となりましたが。一人で行くと丁寧に説明していただくが、どこか緊張してしまう。今年も2人か3人でご一緒できるようならお願いしたい。

(委員)

行きやすさも観点の一つだが、違う視点から言うと、年度スケジュールとして今日が本協議会のスタートで、すぐに夏休みがあつて視察が秋口となるので、見させていただく場面も同じ所という感じもしている。話を伺っていると、夏休み中に先生方が交流する取組が行われているようなので、複数で行くということも、視察させていただく場面もちょっと違う所を見せていただけるような工夫が、今年は無理だとしても、できないかという思いでいる。

(会長)

何年前かは覚えていないが、夏休み中の合同研修会を視察したことがあった。あの頃は8月の日程も入れてもらっていたのかな。事務局からするとこの位しか組めないとか、事情はどうか。もう少し前倒しにすることは難しいのか。

(事務局)

各ブロックで見ていただく取組を集約する時間の問題もあるが、全教職員が集まる機会というのは春の総会等と夏の合同研修会になる。秋はやはり同じような行事が重なり、それが中心になりがちだ。夏の合同研修会の視察については、今後の検討課題とさせていただきたい。

(委員)

誰かが見に行くということは、学校にとっては相当負担があるのか。コーディネーターって名前が付いているのはほとんど教務主任の先生だが、教務主任って結構忙しそうに見える。

(委員)

来てもらうのは全然かまわない。見てもらって校長室で20～30分説明するくらいだったら問題ない。ただ、チーフコーディネーターが視察に対応する時間や各活動についての公式的な説明をする時間が必要となると大変だが。

(会長)

視察する立場から言うと、まず校長室に通されていくつかの資料の説明があり、終わったかと思うと「ご意見を賜りたい」と、何かと拘束される。それも大事だろうが、そのあたりの「意識性」をもう少し弱めていただいて、学校側の負担軽減が図れたらと感じる。学校要覧や指導計画とかは横に置いて、「また見ていただけたら」くらいでいいと思うが。

事務局的には、「それは視察ではない」という感じなのか。

(事務局)

今お話しされている内容については、もう一つの「気軽な形」の方に当てはまると思う。本日の協議を受けて、改めて各校には視察の取組依頼をする。やはり小中一貫教育の視察となると、特徴的な部分を見ていただいて、いろいろなご意見を賜れればと考えている。

授業参観やオープンスクールなどのより気軽な形の訪問についても、企画はしているがなかなか

都合が付かずという状況もあるが、また子どもたちの様子を見ていただいて先生達とも意見交流するなど可能な範囲で参加していただけるようお願いしたい。

(委員)

事務局に聞くが、昨年も10ブロック中8ブロックを視察した形になっているが、これは調整した結果なのか、それともたまたまなのか。

(事務局)

各委員の希望の結果であり、調整はしていない。昨年は8ブロック、~~一~~昨年は6ブロックの視察となっている。

(委員)

逆の手法で、みんなでこのブロックを視察しようと、このブロックのこの日と決めて、一つの取組を違う目で見るという手法もありかなとも思うが。日程調整には苦勞をかけるが。

(会長)

結果的に蓋を開けて見ると、あまり来てもらえなかったとなるのが本当にもったいないと思う。これが今年度のラインナップですと知らせてもらうのが、9月の前半から中頃。それが早くなれば予定を組めるとなるなら、もう少し早くお知らせ願いたい。

委員の皆さんが、メールやラインをしているネット環境ならば、予定を流してもらって各自が名前を埋めていくと、紙媒体より早くなる。貴重な機会なのでみんなが2箇所くらい見れたらと思う。ご検討をお願いしたい。

(委員)

先程の夏季休業中の研修会についても、8月の17日から23日までの間にどのブロックも合同研修会を持つと思う。

(会長)

事務局には負担をかけるが、8月の合同研修会編と秋口以降の取組編を作成願えないか。

(事務局)

今まで夏休み中の訪問とか職員の研修会の様子をご覧いただく機会はなかったと思うし、幸い川嶋校長も委員としていらっしゃるのでもし良ければひろの学園の視察を事務局としてもお願いしたい。

(会長)

市教委としては10ブロックの研修会の日程は掌握しているのか。

(事務局)

年度当初の予定としては把握しているが、その後出張関係や研究会関係が入って日程に変更があったということは把握していない。

(委員)

逆に訪問しても大丈夫なのか。教員同士以外には見られたくない部分もあるのではないか。

(委員)

それはないと思う。ひろの学園で予定しているのは、教員をいくつかのグループに分けて付せんを配り、「意見があればどんどん書いて」「本音で書いて」と計画しているので、個人名が出たりするとは思いますが、視察に来られた人がそれを外で言われるような心配もないと思う。

教師の活動ばかりで子どもの活動は全く見られないことは承知してほしい。教師サイドとしては、年1回定期総会みたいな研修会をやっている所は見してほしい。ただブロックによっては講演会みた

いな形の所もあるし、各ブロックで内容が違う。今回ひろの学園がやろうとしていることも初めての試みなので、蓋開けてみるとねらいと違った結果に終わるかもしれない。

(会長)

委員の皆さんのネット環境を事務局が確認できたら、そして各校長先生の了解がとれたら、明日明後日でもメールで流したらどうか。

(4) 報告4 平成29年度小中一貫教育の取組について

資料(9頁～)により事務局より説明

(委員)

今年度から出てくるラーニングコーディネーターの役割をしていただく先生には大いに期待している。「ネクサスプラン」の話を聞いた時、保護者にはいろんな角度からの期待があったと思うが、「学力の向上」が一番期待が高かったと私は感じている。それが一つ具体化される取組としてラーニングコーディネーターが配置されることに大いに期待している。そちらの進捗状況を1年後に良い形の報告として聞かせていただけるとありがたい。

(委員)

ラーニングコーディネーターについては、今年からということで、具体的な活動・取組は一貫教育課と調整しながら計画を進めていきたい。

本校は外国語活動と外国語科の文科省の指定を受け、3年目の研究報告会を12月8日に行う。英語に限っては、この取組のおかげで、小学校1年から中学9年まで系統的指導、一貫した指導、小学校の教員・中学校の英語の教員・高等学校の英語教員の連携した取組が進められている。この研究を通して、さらに一貫教育が進んでいると自負している。

定期テストについて、シラバスや家庭教育の手引きの公開をして家庭学習の仕方や、不安を取り除く活動をしているが、小学生・中学生では子供の発達段階に違いがあり、評価の仕方も違うので、工夫の余地がある。何らかの工夫を加えてアンケート調査に現れるようにしたい。

(委員)

中学校の定期テストの不安解消として、4年ほど前、西宇治中学校で小学校の先生に中1の中間テストと期末テストを体験してもらい、中1のテストのレベルを認識してもらった。その上で、小学校ですべきことを考えてもらった。昨年、ひろの学園ではテストの実物・テスト勉強計画のサンプルを小学校に配り説明し指導した。定期テストを見たことがない子供・保護者に実物などをご覧いただく取組をすることで解消できる。昨年かなり解消出来た。今年は複数回行いたい。

(委員)

中学校の不安要素として他に、英語、算数から数学への移行がある。英語、数学にすんなり入れる子は他の教科も抵抗なく出来るが、どちらか一つ、あるいは両方つまづいてしまう子は後々しんどくなる。そう言ったこと、情報が保護者の不安になっているので、それを解消していただけたらありがたい。不安を取り除くことによって中学校側の指導も楽になるのでは。

(会長)

算数と数学の問題はいつも指摘されていることである。ある大学の研究でしたか、小学校の算数と中学校の数学は接続一貫されていないので、乱暴な言い方をすれば、「中学に入ったら小学校の算数を忘れろ。リセットだ。」といったすれ違いがある。その辺を夏の研修会で協議していただけたらありがたい。

(委員)

指導の進め方、テスト指導の重要ポイントを小学校と中学校の教員が話し合っただけで決めた事実が重要だと考える。

(委員)

小学校6年生の算数では、子供たちに身に付けさせたい内容の最低ラインについて、小学校と中学校でやりとりしている。このことを受けて、小学校は、卒業時にその内容が身に付いているかどうか、確かめるテストの作成をしている。

(会長)

革新的な新しいことを含めて進めていただけたらありがたい。

(5) 報告5 小中一貫教育に関するアンケートについて
資料(15頁～)により事務局より説明

(委員)

小学校6年生と比べ、中学生用になると漢字が増え、言葉が難しい。資料1の19頁から文字が増えて、回答用紙の書き方も難しい。

(会長)

事務局から、補足はあるか。

(事務局)

中1については新たに、不安の解消に役だった取組は何なのかという質問を設け、答えやすいように具体例をあげたので、質問や文字量が多くなった。集計結果については、進めてきた一貫教育について具体的な成果が出ていると思う。教員が把握していることもあるが、児童・生徒がどう感じているのかということを知ることができる。

(委員)

保護者用のアンケートは回答の仕方が選択式になっている。保護者から「これで本当の深いところをわかってもらえるのか。」と質問があった。保護者には言いたいことがあれば余白に書いたらと答えたが、実際に書いてきてる人はいるのか。

(事務局)

稀にある。

(会長)

回答様式については来年度の課題になるかもしれない。

(委員)

アンケート変更時、前のアンケートを添付してくれたら会議の時に変更箇所がわかりやすかったと思う。

(委員)

資料1の21頁の保護者の頁を見て、親が学校の取組を知る事ができる内容で良いと思った。

(会長)

これで協議を終わりたいと思うが、他に何かあるか。

(委員)

最初に宇治黄檗学園開校当時に、施設一体型の方の不公平感の話があったが、不公平感は感覚的には感じるものであっても、分離型でも不公平感はない。一体型の施設が圧倒的に優れている訳ではない。一体型には一体型の課題があり、分離型には分離型のメリットがある。一概に一体型がよ

くて、分離型が損だといった論議はナンセンスである。

(委員)

保護者的見地からですが、施設一体型と分離型で、小学校の保護者から見ると学校が一体型になると地域によっては遠くなる、広域になれば通うこともできなくなり、実質不可能となる。文科省で言う適正規模に満たない学校の多い地域では一体型もありかと思う。保護者から見るといろんな見方がある。

(委員)

色々とお互いに良いところを競い合う段階かなと思う。

(委員)

南小倉小学校は小さな古い学校である。1クラスの学年がたくさんあり、保護者の方は人数が少ないので一貫校になることを希望している。1年から6年までずっと同じクラスなので、西小倉小と一緒にしたら良いなとも言っている。1クラスの学年が多いので、子供たちは大勢の中で勉強した方が良いと保護者は思っている。震災前には西小倉の地域で統合の話もあったが、震災後になくなった。高齢化が進む中で、子供の数も少なく、学年1クラスが増えていくことを気にしている。

(会長)

以上の協議をもって本会を終了します。

(事務局)

今後の推進協議会の日程について説明

3 閉会

岸本教育部長より閉会の挨拶